色あせた紙に温かみ

絆 むすんで

広島戦災児育成日誌から

色あせた一枚一枚のページに、一筋の思いがこもる。「広島戦災児育成所」の日々をつづった「育成日誌」。記された一つ一つの文字は、集団で暮らす孤児たちの成長の記録。教職員たちの温かいまなざしは、子の健やかな成長を願う親心を思わせる。日誌は、絆を固く結び合った一つの「家族」の記録でもある＝1面関連。

（石川昌義、下久保聖司）

家族

愛の至らざるを反省す

一九四五年十二月二十三日。育成日誌第一巻の書き出しは、こうだ。

「七名の戦災児（中略）当所着（午後）七時頃」

「児童就寝後、所長より職員一同に挨拶。（中略）その任の大きさに感銘。児童達の当所収容の幸福を思ひつつ職員一同十時過ぎ就寝」

職員と孤児たちの日々の営みが始まった。

広島県北の疎開先などから、身寄りを亡くした子どもたちが次々と集まった。疎開先で子どもの世話をしていた若い女性教師たちも、育成所を支えるため駆け付けた。

「児童収容以来、炊事、寮母等とて揃はず、女先生方夫々多忙中にもかゝはらず、開所式に着る児童の服…修理等実に涙ぐましき働き振り。感謝の外なし」（46年1月17日）

育成所創設者の山下義信氏は日誌の欄外に「これこそ母の鑑なり」と書き添えた。職員には再三「父となれ、母となれ」と諭した。

家族を失ったストレスからか、子ども同士のトラブルは絶えない。

「喧嘩をして蒲団等に水をぶちかける」（46年2月9日）

「（個人名）昼食後蓬摘に出たまま帰所せず。私達の愛の至らざるを反省す」（46年3月20日）

対応に追われながら、子どもへの接し方を常に考える職員たち。真摯な姿勢が垣間見える。

味気なくなりがちな施設生活に家庭的な雰囲気をもたらそうと、新しい試みも始まる。班別に子どもたちの面倒を見る「担任母」制度だ。

「子供達は殊の外喜び、やっと心の落ち着きを得たかの如く、それぞれに満足の情を表してゐる。物質的方面では何一つなしえざる力弱き母なるも、精神的には如何様にも尽し、子供らの良き母となりたい希望なり」（46年4月19日）

食事や寝起きを共にする「もうひとつの家族」。育成所を巣立った人たちは還暦を過ぎた今も、当時の職員を「お母さん」と呼ぶ。

育成所の日々の出来事、三食の献立、職員らの気付きなどが淡々とつづられた育成日誌。設立当初の育成所の様子を今に伝える

食料

南瓜、芋等の植付準備、毎日これに従事す

育成所の生活は、自給自足が柱だった。

「馬鈴薯植付」（46年3月15日）

「南瓜栽培の下拵」（46年4月2日）…。

周辺の畑や野山で食料調達に精を出した。それでも、状況は好転しなかった。

「目下の食糧事情実に窮迫せるものあり。それを充分（十分）に児童達にも知らせ、南瓜、芋等の植付準備、毎日これに従事す。高学年児童は常に畑についてゐる如くしたい」（46年4月20日）

ある日の献立は「朝・雑炊（だん子入り）、昼・あさり汁、夜・いも飯、いかなご、野草の煮付」。職員はこの日、こう日誌を書いた。

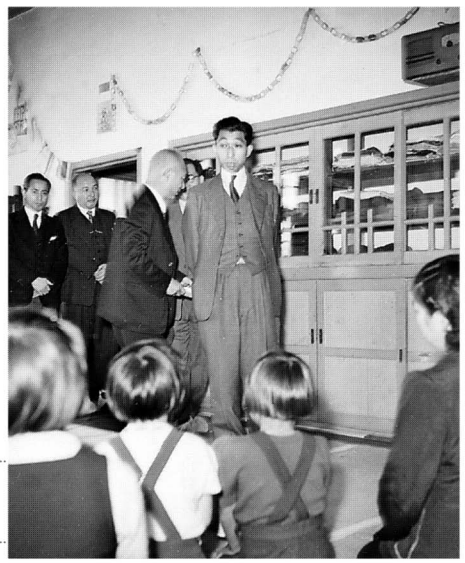
「子供達は無心に野草を採取するやうになり、これが食膳に供せられることは一層励みになることであらう」（46年4月22日）

子どもたちにたくましさを身につけさせようという心情がにじむ。

四七年に入ると、青年団や婦人会の支援が本格化した。さらに、米国の民間支援団体による「ララ物資」を受け、食事内容が充実した。ソーセージやライスカレー、チョコレートなどの記述も見え始める。

四七年八月三十一日発行の「廣島戦災児育成所要覧」は、こう記す。「昭和二十一年の食糧危期（機）の時にはどんなにもがいても充分のことが出来なかった（中略）現在は体重平均五kg以上も増加し血色も極めてよく入所当時の悲惨な栄養失調の面影は全くない」

元気よく馬跳びに興じる　（1948年2月）



高松宮殿下（中央）も育成所を視察に訪れた　（1948年10月21日）

子どもの姿 生き生き

努力と支え さらに調査を

育成所で育った人たちの証言掘り起こしを提唱する児玉教授

日誌を読み解く

三重大教授　児玉克哉さん

「原爆投下という非日常下で、家族という日常を再現する営みの大変さがうかがえる」。三重大人文学部（社会学）の児玉克哉教授（48）は、そう育成日誌を読み解く。安芸高田市出身で、広島大学生時代から二十数年来、孤児問題を調べてきた。モノがあふれ、家族の絆が細る現代に、育成日誌は何を訴えかけるのか―。

原爆で体や健康を傷つけられた被爆者と同様に、多くの子どもが一瞬にして親や家族を失い、心に深い傷を負った。その数は「二千人以上」とも「五千人」とも言われる。うち一部の子どもが施設に入った。どんな食事をし、どんな暮らしだったのか、それらを欠かさずつづった育成日誌は貴重な資料だ。

淡々とした記述だが、職員の子どもへの愛情、教育に対する情熱がうかがえる。「愛の足りなさを痛感する。如何にして彼等を救い得るか。自分には分からぬ」（一九四六年四月二十七日付）とあるように、思うに任せない苦悩もうかがえる。

朝昼晩の食事内容がこまめに記録されている。物不足の時代に、よくもこれだけの食料を集めたものだと驚かされる。間食にチョコレートも出されており、「ララ物資」など米国からの救済も施設を支えた。

育成所の献立を記録した別の資料を参考に調べると、一日当たりの摂取カロリーは二四三九キロカロリー（一九四九年一月）。他の孤児施設では、ひもじさゆえの脱走もあったのに比べ、育成日誌にはそのような記述が少ない。

日誌を読むに当たり、孤児の境遇ばかりに目を向け、「かわいそうに」「大変だっただろう」ととらえるのは、間違いだと思う。

勉強、音楽、遠足…。子どもたちの生き生きした姿がつづられている。あの時代に、子どもらしい普通の毎日を普通に続けさせるため、創設者の山下義信氏をはじめ多くの職員の相当な努力がうかがい知れる。

この日誌は、職員や保母という一方向から書かれている。子どもの視点はない。元孤児はその後の人生で、育成所にいた過去を隠し、女性の場合は結婚相手にも黙してきた。

ただ、そうした人たちも年を重ね、支えてくれた人たちへの感謝や、自分たちのような孤児を再びつくってはならないという平和の誓いなど、心境に変化があるはずだ。

原爆孤児たちがいかにして生き抜き、どのような人たちが支えてきたのか、育成日誌を基に、さらに調べを深めるべきだと思う。

（談）